

- 加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美（編）(2009)『否定と言語理論』開拓社．
- 北原保雄（編）(2003)『明鏡国語辞典』携帯版．大修館書店．
- 久野正和(2009)「否定一致表現の構成要素と認可の方略」加藤泰彦ほか（編）、pp. 97-118.
- Miki, Etsuzo. (2012) 'Carston on metalinguistic negation.' Akiko Yoshimura *et al.* (eds.), *Observing Linguistic Phenomena: A Festschrift for Professor Seiji Uchida on the Occasion of His Retirement from Nara Women's University*, pp. 179-190. Eihosha.
- 吉村あき子(2000)「*一滴でも飲まなかった / *飲んだ」『月刊言語』第29巻11号、pp. 52-58. 大修館書店．
- 渡辺 明(2009)「両極性表現」加藤泰彦ほか（編）、pp. 74-96.

7) 一方、状態動詞「知っている」「話せる」の場合には、このような反復的な事態を想定することが困難である。それゆえに、「* 僕はこの学校の先生を1人でも知らない」(=(11)) / 「* 僕はアラビア語を一言でも話せない」(=(14))などは極めて不自然に感じられる。

8) 北原(編)(2003)は「でも」の語法について「下に打ち消しの語を伴うときは、全面的否定の意となる」と述べ、「たとえ一円でも出しはしまい」の例を挙げている。

9) この解釈は、(19')では補文節を[]で括って示したが、例えば、補文節と主節の境界にポーズ (pause) を置くことによっても鮮明にすることができよう。

10) これは発話者自身の想定ではなく、通例、他者による想定と見なされる。(21)-(22)で発話者はこの想定を否定(否認)するのである。

11) Bolinger (1977: 34) などでは、これを否定の「配分的 distributive」な性質と呼称している。

12) このような全面否定は「僕はこの学校の先生を1人も知らない」の文によっても表わすことができる。この場合には、しかし、(21)-(22)のように発話場面的に想定されている10通りの可能性を個々に打ち消すのではなく、一般に「(X人) 知っている」ということが必然的に「(少なくとも) 1人知っている」($X \geq 1$)を含意することを踏まえ、その最小値「1」が成立しない旨を示して「知っている」ことを全面的に否定するのである。Cf. 注5)。この観点に立てば、「1人でも... というわけではない」という否定表現は対話的に想定されている命題を打ち消す「否認 (denial)」と見なすことができるのに対して、「1人も... ない」という言い方は否定的命題を積極的に主張する、この意味で狭義の「否定 (negation)」と呼ぶことができよう。なお、後者は次のような容認度を示す: 「* 太郎は本を1冊も読んだ」 / 「太郎は本を1冊も読まなかった」 / 「* もし太郎が本を1冊も読んだら、ほめてあげてほしい」 / 「* 太郎は本を1冊も読んだの?」 / 「? * 花子は太郎が本を1冊も読んだとは主張しなかった」(例はいずれも渡辺(2009)による)

13) 査読者からは構文文法の観点から「数詞1+分類詞+でも」を考察する有意義性が指摘されたが、成程そのような見方も可能であると思う。また、「^(*) 1人でも知っている」が次のような対話状況では容認可能になる旨の指摘を受けた: A: 国会議員に知り合いなんていないよね? B: 1人知っているわ。Xさんよ。A: 1人だけ? B: 1人でも知ってるでしょ。正しい指摘であり、確かにこのようなやり取りが可能であると思う。この状況は、しかし、「知っている」ということばの定義をめぐる当事者間で折衝 (negotiation) が行なわれている、いわゆるメタ言語的な状況であり、むしろ、その観点からアプローチするのが得策でもあり、かつ有意義ではないかと思われる。Cf. Miki (2012)。

参考文献

Bolinger, Dwight. (1977) *Meaning and Form*. Longman.

ールを一滴でも飲んだ」

2) 考察の対象をもう少し広げると、例えば「いまはビジネスチャンスが1つでも欲しい」「いまは(たとえ)1つでもトラブルは起こって欲しくない」等々では形容詞も関係する。

3) 「何人か/何人も知っている」のようにXの値が「何人か」「何人も」となる場合にも、精度には欠けるが、具体的な数が問題となっている点は変わらない。

4) 本稿で取り上げる「でも」の用法に関して、北原(編)(2003)は「《少量を表す語に付いて》肯定表現で、せめてそのくらの意を表す」と記している。

5) これによって「(少なくとも)1人またはそれ以上の先生を知っているかどうか」という内容が疑問の対象となる。このように最小値「1」が選択されるのは、「10人の先生すべてを知っている」場合も「1人の先生を知っている」ということは含意(entailment)として成立するし、同じように、「6人を知っている」場合、「3人を知っている」場合にも「1人を知っている」旨を主張することが可能であり、想定されるいずれの選択肢も排除しないからである。Cf. 久野(2009)。

6) この場合、モダリティ(modality)の強さはさまざまであって、例えば、話し手のコミットメント(commitment)がずっと強い「たぶん…だろう」の表現では、「?たぶん僕はこの学校の先生を1人でも知っているだろう」のように容認度は依然として低い。これは「1人でも」が表わす選択の任意性と「たぶん…だろう」が表わす事実性へのコミットメントの度合いとが相容れにくいためであろう。(Cf. 「たぶん僕はこの学校の先生を1人か2人[1人や2人/何人か](は)知っているだろう」)ちなみに、否定文の場合にも「(もしかしたら)僕はこの学校の先生を1人でも知らないかもしれない」のように容認度が向上するように思われるが、肯定文の場合に比べて幾分の不自然さを感じられる。さらに、「*1つでも景品が不足する」/「(もしかして)1つでも景品が不足するかもしれません(ので)」/「?(もしかして)1つでも景品が不足しないかもしれません(ので)」/「(もしかして)1つでも景品が不足しないともかぎりません(ので)」等々の例も含めた考察が必要である。

なお、(14)の「*僕はアラビア語を一言でも話せる」の文についても(16)と同じことが当てはまる。「話せる」は状態動詞であり、「アラビア語を(X程度)話せる」のであるかぎりにはXの値を具体的に特定することが可能であり、この理由で、Xの選択肢に任意性があることを表わす「一言でも」とは「*一言でも話せる」のように共起しにくい。しかし、この場合も「話せる」程度が可変するような文脈が与えられれば容認性は高まる。Cf. 「(君がそばに付いていてくれたら今度は)僕もアラビア語が一言でも話せるかも知れない」ちなみに、「話せる」に対して「話す」は行為動詞であり、行為の反復が可能である。したがって、「(アラビア語の会話力を付けるために機会があれば)僕は一言でもアラビア語を話した」/「(スパイであることを見破られないように)僕は(たとえ)一言で(あって)もアラビア語は話さないようにこころがけた」のような文は容認可能となる。そして、この場合も習慣的(反復的)な行為が表わされる。

ことが不可欠であり、同じく「9人知っている」「8人知っている」等々が成立するためにも「1人知っている」ことが必須であることを踏まえて、およそ「知っている」という事態が成立するための最小値である「1人知っている」ということが10通りの可能性のいずれの場合にも成立しない旨を述べて、「僕がこの学校の先生を知っていると主張した」という想定¹⁾²⁾を全面的に否定するのである。

4. 言語データを言語直観 (linguistic intuition) によって容認可能もしくは容認不可能なものに区分し、そして容認可能な文のみを生み出して容認不可能な文を生み出さない「言語規則 linguistic rules」を明らかにするというのが言語学の常套的アプローチであるが、(1)~(2)を容認不可能とし、これらの文を生み出さない規則を立てれば、その規則によって(1')~(2')のような文もまた容認不可能として排除されてしまうことになる。論者たちの言う「両極性」表現——「最小の数詞 (あるいはそれに相当する語句) + 分類詞 + でも」から成る表現——というような種類 (class) を立言することが果たして経験的に妥当であるのかどうか¹⁾³⁾。他の諸言語にはそのような種類が見い出されるとのことであるが、たとえそうだとした場合、そのことを念頭に置きつつ、まず日本語「でも」の使用の実態を踏まえ、その意味機能の探究が広くかつ詳細に行なわれることが必要となる。とりわけ、諸言語を含めて人間言語 (human language) の一般的特性を明らかにしようとする場合にはそれは必須の充足条件でなければならぬ。

* 本稿の執筆にあたっては熊本言語学研究会の松瀬憲司、市川雅巳、村尾治彦各氏から有益な評言を頂戴した。誌して深謝の微意を表したい。また、査読者からは全篇に亘って懇ろなる批判を忝のうした。筆者の力量不足の故、すべてに答え切れていないことを遺憾とするが、拙論再考の好機会を与えて頂いた。心より御礼を申し上げます。

注

1) (1)~(5)の容認度の判定は渡辺(2009)による。以下に、吉村(2000)からの例も挙げておく：「*花子はお酒を一滴でも飲まなかった」/「花子はお酒を一滴でも飲むことを拒否した」/「もし花子がお酒を一滴でも飲めば、忘年会も楽しくなるだろう」/「女性の中でお酒を一滴でも飲んだのは、せいぜい5人だった」/「*花子はアルコ

(20) * 僕はこの学校の先生を1人でも知っている。(=(16))

(21) 僕はこの学校の先生を1人でも知っているとは主張しなかった。

もう少しこなれた日本語に言い換えれば、(21)は、

(22) a. 僕はこの学校の先生を1人でも知っているなんて言わなかった。

b. 僕はこの学校の先生を1人でも知っている(など)と言った覚えはない。

とでもなろうが、この場合、単独では容認不可である「* 僕はこの学校の先生を1人でも知っている」という文が(21)~(22)のような環境に置かれるとそれほど違和感なく感じられるとすれば、それはまさしくこの文が補文節として埋め込まれていることによると言えよう。では、なぜ、(20)は(21)~(22)のような補文節に埋め込まれると容認度が向上するのであるか、これがいまや論点となる。

問題となっている解釈は、先生が全部で10人いるという仮定で再度パラフレーズすれば、「僕はこの学校の先生を知っているなんて言わなかった、10人の中の何人についてであれ、知っていると言った覚えはない」のようになる。この解釈では「僕(=発話者)がこの学校の先生を(X人)知っていると主張した」ことが発話場面的に想定¹⁰⁾されていることになるが、この想定を発話者本人が受容(accept)するのを拒否していることが表わされる。発話者は想定される10通りの可能性のそれぞれを打ち消す¹¹⁾のであるが、この複数の可能性が「でも」の表わす選択の任意性と意味的にうまく合致する。(21)~(22)の文の容認度が高くなるのは、このような理由によるものと考えられる。

(21)~(22)について若干の説明を補足すれば、この場合、「僕」は「先生を10人全部知っている」とは言わなかったのであり、「8人知っている」とも「5人知っている」とも言わなかったのである。発話者(=「僕」)は、「10人知っている」ことは「1人知っている」ことを論理的に含意(entail)し、同じく「9人知っている」「8人知っている」「7人知っている」等々もひとしく「(少なくとも)1人知っている」を含意することを踏まえ、したがってまた逆に、「10人知っている」と主張するためには「1人知っている」

(1')-(2') のような言い方がごく自然な日本語として容認されるのは、大方の異論のないところではないかと思う⁸⁾。

さて、残る問題は次のような例である：

(19) 花子は太郎が本を1冊でも読んだとは主張しなかった。(= (5))

論者たちの議論を要約すれば、(19) の補文節（「* 太郎が本を 1冊でも 読んだ」）は、「1冊でも」が両極性表現であるために、この部分だけを判定すると容認不可であるが、これが「(花子は…とは) 主張しなかった」のように否定的な主文の従属節として埋め込まれると容認可能になるというものである。われわれの立場からは、すでに見たとおり、適切な文脈化を行えば、補文節に相当する「太郎は本を 1冊でも 読んだ」からして可能な言い方であり、この意味解釈の下で (19) の文が容認可能と判断されるのは何も不思議ではないのだが、(19) の「1冊でも」は必ずしもこのような解釈に限られないように思われる。たしかに、(19) を

(19') 花子は [太郎が (読書力を付けるために) 本を (毎月) 1冊でも 読んだ] とは主張しなかった。

のように補文節を間接引用的にとらえて、前述の (1') のように、「1冊でも」の作用域 (scope) を補文節内に限定する解釈も可能である⁹⁾ が、これとは別に、(19) の「1冊でも」が文全体に作用する解釈、つまり、「花子は太郎が本を読んだなどとは言わなかった、それがたとえ1冊であっても (そんなことは) 言わなかった」のようにパラフレーズできる解釈もありえよう。そして、論者たちが (19) の文について問題としているのはこちらの方の解釈であると考えられる。

このように、「1冊でも」にもう一つの意味解釈が想定されるのは、例えば、次のようにそのままでは容認不可と見なされる (20) のような文でも、(19) にならって補文節に埋め込むと、俄かに自然さが高まるように思われるからである：

以上を要するに、「僕は先生を (X 人) 知っている」のような断定文では、X の値は特定化されて選択の余地がない。この点が「(1 人) でも」の表わす選択の任意性と相容れず、そのために (16) (= 「*僕はこの学校の先生を 1 人でも知っている」) は不自然に響くということになるが、これには「知っている」が状態動詞であることが決定的に関与している。動詞「知っている」の状態性 (stativity) が数詞「1」+分類詞+「でも」の表わす選択の任意性と意味的に整合しないのである。これに対して、「食べる」「口にする」「貯金する」のような行為動詞では行為を反復するということが可能であり、この反復可能性が選択の任意性とうまくかみ合う。例えば、(6) の文では「(ビタミン補給のために) 太郎は一かじりでもリンゴを食べるようにこころがけた」のように、「リンゴを (X かじり) 食べる」という反復的な行為のどの場合にも何らかの値を X に想定することが可能である。「太郎」はある場合には「リンゴを二かじりした」かも知れないし、別の場合には「やっと一かじりした」だけかも知れないが、いずれにしても「(0ではなく、少なくとも) 一かじり」以上は食べたのであって、この点では (8) (= 「復興基金の足しになるようにと) 太郎は1円でも貯金している」) も同じである。(7) のような否定文の場合にも「お酒を口にしない」という事態の反復を想定することができる⁷⁾。飲酒する機会のどの場合にも「花子」は「グラス半分」の酒を飲まず、「盃一杯」の場合にも飲まず、「赤酒一滴」であっても飲まないのであり、この「お酒を口にしない」という事態の反復可能性と「(一滴) でも」が表わす選択の任意性とが不整合をきたさない。

このように、(6)~(8) のような容認可能な例ではいずれの場合も反復的・習慣的な出来事ないしは事態が表わされ、この反復性の中に選択の任意性が成立していると考えられる。

3. 以上を踏まえて、冒頭 (1)~(2) の例を再考してみよう。「読む」という動詞も行為動詞であるから、前節のような文脈化を行なうことによって、次の文が可能であることが明らかになる：

- (1') (読書力を付けるために) 太郎は本を (毎月) 1冊でも読んだ。
 (2') (視力をこれ以上低下させないために医者忠告を守って) 太郎は本を (たとえ) 1冊でも読まなかった / 1冊でも読もうとしなかった。

は、先生が10人いると仮定すると、その10人すべてであれ、その中の8人であれ6人であれ、ともかくも具体的に特定できる人数であるのが通例であろう³⁾。これに対して、(15)のように「君はこの学校の先生を知っているか？」と質問したり、「もし君がこの学校の先生を知っているのならば」のように仮定的に言う場合には、「君」が「知っている」先生の人数(Y)は、10人全部の場合もありうるし、9人の場合もあり、9人でなければ8人、8人でなければ7人等々というように10通りの可能性を想定することができる。そして、「...でも」という表現は、いま考察している例のような場合には、例えば、「5人でも (よいし) 8人でもよい」というように、「...」に入る値の選択が任意的 (arbitrary) であることを表わすもののように思われる⁴⁾。したがって、「1人でも」と言う場合には、その可能性のなかの最小値——つまり、「(先生を) 知っている」極限的な状況——が選択されていることになる⁵⁾。

そうすると、(16)では「(X人) 知っている」という断定が行なわれているからXの値は具体的に特定可能ということになるが、しかし、前述のように「(1人) でも」は選択の任意性を表わすから、結果として、Xの値が1つに特定できないということになる。この意味的な不整合 (mismatch)、つまり、Xの値が特定可能であることを含意 (imply) する主張を行ないながら、その含意が成立しない主張を同時に行なうという矛盾——これが(16)の文の容認度を著しく低くしている主因ではないかと思われる。これに対して、(15)のように「1人でも知っているか？」と質問する場合には、「君」が知っている先生の数(Y)はやはり10通りのケースが考えられるが、このYの10通りの可能性と「(1人) でも」が表わす選択の任意性とは意味的に不整合をきたさず、その結果、(15)の文は自然に聞こえる。したがって、例えば、容認不可とされる(16)の場合にも、次のように発話の断定性 (assertiveness) を弱め、多少ともXの値に選択の余地を与えると自然さが高くなるように思う⁶⁾：

(17) もしかしたら僕はこの学校の先生を1人でも知っているかもしれない。

(18) もし僕がこの学校の卒業生だったら、たとえ1人でも先生を知っていたかもしれませんが。

- (7) (禁酒を誓っている) 花子はたとえ一滴でもお酒は口にしなかった。
 (8) (復興基金の足しになるようにと) 太郎は1円でも貯金している。

他方、論者たちの予測するとおり、次の疑問文 (9) (12) や条件節を含む (10) (13) は自然に聞こえるが、(11) (14) のような平叙文では、肯定文であれ否定文であれ、たしかに不自然さが著しく高くなるように思う：

- (9) 君はこの学校の先生を1人でも知っているの？
 (10) 君がこの学校の先生を1人でも知っていれば、助かるんだけどね。
 (11) * 僕はこの学校の先生を1人でも知っている / 知らない。
 (12) 君はアラビア語を一言でも話せるのかね？
 (13) 僕が一言でもアラビア語を話せれば、助けてあげられるんだけど。
 (14) * 僕はアラビア語を一言でも話せる / 話せない。

先の (6)~(8) の文がいずれも自然に響くのに比べて、これらの文のとくに (11) (14) が不自然に聞こえることには、どうも前者 (6)~(8) に含まれる動詞「食べる」「口にする」「貯金する」が行為を表わすのに対して、後者 (11) (14) の「知っている」「話せる」は状態を表わす動詞であることが関係しているように感じられる。私見では、このような動詞との関係²⁾において、数詞「1」+分類詞+「でも」という表現のもつ意味機能が鮮明になるように思われる。

以下、本稿では、とくに否定との係わりを念頭に置いて、この点を少し掘り下げて考察してみたい。

2. 前節で述べたように、次の (15) のような文に比べて、(16) の文は容認されにくい。これはなぜであろうか：

- (15) 君はこの学校の先生を1人でも知っているの？ (= (9))
 (16) * 僕はこの学校の先生を1人でも知っている。

一般に、(16) のように「僕はこの学校の先生を (X 人) 知っている」と主張しないしは断定 (assert) する場合には、「僕」が「知っている」先生の人数 (X)

「両極性」表現について

—— 否定小考 ——

三木 悦三

1. 近年、「両極性 (bipolarity)」と呼ばれる極性表現が論議の対象となっている。「両極性」表現とは、その名の示すとおり、否定極性と肯定極性の両方の性質を具えた表現を言うが、日本語では数詞「1」+分類詞に「でも」の付いた表現（「一滴でも」）がその代表例として挙げられる。

この種の表現は、(1)のように肯定文には現われず、(3)のような条件節、(4)のような疑問文、さらに(5)のように主節に否定語（「ない」）を含んだ補文節 (embedded clause) には用いられるが、一方、その肯定極性によって、(2)のように同じ節に否定語が共起すると非文法的と判定される¹⁾：

- (1) * 太郎は本を1冊でも読んだ。
- (2) * 太郎は本を1冊でも読まなかった。
- (3) もし太郎が本を1冊でも読んだら、ほめてあげてほしい。
- (4) 太郎は本を1冊でも読んだの？
- (5) 花子は太郎が本を1冊でも読んだとは主張しなかった。

一見するかぎり、なるほど(1)~(2)のような文は(3)~(5)の文に比べて不自然さ (unnaturalness) が高く感じられ、この不自然さは、論者たちの主張するように、「1冊でも」という表現が「両極性」を具えていることに起因しているように思われる。しかしながら、少しく内省してみればすぐ判明するように、事実はそれほど単純ではない。

たとえば、(1)~(2)のように容認不可とされる肯定文あるいは否定文であっても、次のような例では数詞「1」+分類詞+「でも」の表現は極めて自然に感じられる：

- (6) (ビタミン補給のために) 太郎は一かじりでもリンゴを食べた。